

「真の知識」

～グノーシスとエピグノーシス～

ローマ書 10:1-11

私たちの目線は、いつも何かをしていることに対しての評価が伴うことが、自分の人生の結果であると思います。何故かという、私たちの生きる目的が結果になっているからです。結果に目が行くことに危険があるのです。その結果によって自分がしていることに意味があるのかないのか判断してしまうからです。一番大変な時期は1歳から3歳までと言われています。しかし、こどもは3歳までの記憶を消してしまうと言われています。なぜでしょうか。3歳までに培われた価値観が人生の判断の基準になっています。私たちが本来一番覚えておかねばならない大切な時間を私たちは忘れてしまっています。忘れていたのは意味があるのです。私たちは人生を通して、礼拝を通して3年間で得られるはずだった目的をもう一度探していきたいのです。

グノーシスとは頭で知っている客観的に知っている状態。ギリシャ語で知識という意味。エピグノーシスとは、真の知識です。「しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。」とあるように、私たちが頭で理解していることに対する危険性について語っているのです。

■ 本来知っておくべき自分のことを 本当に知っているのでしょうか。

人のことは良く見て知っています。目は自分を見るように作られていませんよね。このように、自分のことを見ることは難しく、何となくは知っています。私たちの過去のことも知っています。これまでの人生がどういう意味があって今日があるのか知っているのでしょうか。99%の人が、あの人がこうしたからこうなったと多くの人は思っており、知ったつもりでいます。私たちが自らを見ずに今日生きているとしたらどういうことになるのでしょうか。パウロはもとサウロ（ヘブル語で「求める」という意味）をつけられ名前にあるように期待に応えるように生きていました。しかし、パウロ（ラテン語で「小さい」という意味）で深い意味がありました。期待という大きな重圧のために、彼らの求める義とは違う知識によって行われた正義を行っていったのです。私たちは間違った正義、自分を王としてしまうのです。

■ なぜ、私たちが私たち自身であろうと しなければならないのでしょうか。

「兄弟たち、私が心の望みとし、また彼らのために神に願っているのは、彼らの救われることです。私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。」<ローマ 10:1-2> 彼らは熱心に行っています。そして、このことは日本人にも非常に言えることです。私たちは「こうだ」と言えるものを持っています。ユダヤ人もトーラという伝承立法（ルール）がありました。その熱心は誠の熱心（知識エピグノーシス）ではなく、外側だけのうわべのもの（グノーシス）だということが危険なのです。プライド（あなたの考え）を捨てろと言われているのです。考えが違えば変えれば良いのです。聖書はあなたを罪人だと言うのはズレているからなのです。ズレているのなら、罪人だと言われて傷つくのです。戻れば罪ではないのです。

■ 信じることのできない痛み

信じてそうならなかったことを、私たちは幼いころからずっと経験しているからです。それを私たちは当たり前の人にやってしまっているのです。それは、私たちの目線や根底がズレているからです。何がズレたかと言えば聖書は問題は1つだと言っています。私たちが信じられなくなったという弊害です。私たちはすぐに疑いの心ができます。その人のことを信じることができません。しかし、信じる力というのはその人が裏切ってもそのことが結果ではないので信じられるのです。親は子供が何度失敗しても信じることができます。わかっているのに自分のことはそうはいきません。自分が失敗することについては信じるのができなくなっています。ということは、相手も信じないのです。信じられないということが私たちの最大の悲劇です。信じられなくなった私たちは期待に生きて生きようになるのです。相手の期待に応えようとする

ようとする。自分の存在意義を誰かより優越にしようとするのです。

ですから私たちはこの御言葉を読むのです。
「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」<ローマ 10:9-10> 神様は天の父、お互いに信じあう親子関係のように、私たちがもともと信じられる存在だったのに信じられなくなったあなたに対して信じられる恵みを戻したいのです。信じる行為は期待です。期待というのは時を待っているだけなので必ず来るのです。期待というのはその時が来た時に、きちんと見出すことができます。神様は私たちに人生という大きな時を与えました。そしてその人が生きる目的を与えています。教会に来る理由は、私たちがその人生の目的を見出すことです。律法の目的はキリストであると書いてあったのです。そのキリストである目的は、彼は見える愛の形です。愛するというものがどういうものであるかを示し、私たちの人生の目的は愛することであることがわかります。目的である愛に気づかせるために律法ができたのです。私たちが罰に定めるために律法があると思っていますが、律法は罰に定めるのではなく赦すためにあるのです。イエスキリストがなぜ十字架にかかったかと言いますと、あなたを期待に応えさせるためではなく、その人の時が来た時にその人であるために、キリストはあなたの十字架を背負ったのです。あなたの罪が赦されるためです。私たちが赦されることは、あなたが赦すためです。神様は法律を与えて赦されたことと赦すことを伝えたかったのです。

私たちはパラドクス（矛盾）から抜け出さなければなりません。私たちは自らの罪を認めるためにルールがあります。そのルールは赦されるためにあるのです。戻るためにあるのです。しかし、自らの意味を、相手を罵ることで得ようすると、結果、人は慈善活動をしなくなるのです。しかし、私たちは一善によって一躍を報いることができないことを知っています。でも私たちは良いことをすることで、自らの存在意義を見出そうとしてしまうのです。これが悲劇のスタートです。人間は善を行うことによって頂上に登ろうとしています。しかし、疲れるだけです。このローマ書 10 章が伝えたいことは、ユダヤ人はそのように頂上に登ろうとしたけれど登れなかったと書いてあるのです。もう一度、あなたは行いによって義を得ようとしていないのでしょうか。その義を得ようとする行いは相手を裁くものになって、本当に愛さなければならないものを排除してしまうことで私たちはその生きる恵みを損なっていくことになる、ということなのです。だから、イエスキリストは十字架にかかることによって、そうではない道を示し、あなたがどうやってこの地を生き抜いたらよいかを示すだけではなく、私たちが死んだ後に、赦されたものとしてどのように歩むべきかという彼の恵みを与えてくれたのです。

最後に

だからこそ私達たちは、期待に応えようとし、熱心に生きることに熱心になるのではなく、「こうだ!」というプライドを捨てて、創造主が与えて下さっている計画を信じるものになりましょう。神様と私達は親子関係なのだと、だから信じられることを伝えたいのです。

ローマ 10:1-4

『兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願っているのは、彼らの救われることです。私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。』

(要約者: 澤口 建樹)

(2019年9月15日)